

第4回（平成20年度）IODP部会・執行部会 議事次第

日時：2008年8月1日（金） 14：30～17：30

場所：海洋研究開発機構東京事務所 大会議室

出席者（敬称略）

執行部：川幡穂高（東京大学）阿波根直一（北海道大学）安間 了（筑波大学）井上麻夕里（東京大学海洋研究所）坂本竜彦（海洋研究開発機構）高澤栄一（新潟大学）日野亮太（東北大学）松本 剛（琉球大学）山崎俊嗣（産業技術総合研究所）山田泰広（京都大学）山本啓之（海洋研究開発機構）

オブザーバー：河野 長（東京工業大学グローバルエッジ研究院）

文部科学省海洋地球課：宿利一弥 戸谷洋子 笹山岳大

海洋研究開発機構 国際課：花田晶公 肥田慎司

海洋研究開発機構 CDEX：川村善久 江口暢久

事務局：中山敦志 加賀谷一茶 吉岡由紀

欠席者（敬称略）

執行部：荒井晃作（産業技術総合研究所）池原 実（高知大学海洋コア総合研究センター）北村晃寿（静岡大学）小平秀一（海洋研究開発機構）

議事次第

報告事項

1. J-DESC コアスクール:ロギング基礎コース実施報告〔事務局〕 [資料 1]
2. IODP 掘削プロポーザル作成支援課題 選考結果について〔事務局〕 [資料 2]
3. 専門部会活動報告
・掘削航海専門部会〔坂本・山崎委員(兼 掘削航海専門部会委員) / 事務局〕 [資料 3-1,3-2]
4. 普及広報関連報告
・南海掘削シンポジウム準備状況〔川村オブザーバー 資料未達〕 [資料 4]
・IODP 普及キャンペーン(産業技術総合研究所)開催報告〔事務局〕
・JR 号 3 航海の事前普及広報について〔事務局 資料なし〕

検討事項

5. 地質学会 日韓合同シンポジウム&WS 準備状況〔松本委員/事務局〕 [資料 5-1,5-2]
6. ちきゅう船上スクールへの協力体制について〔川村オブザーバー/事務局〕 [資料 6]
7. SASEC Big Meeting へ向けて 2
・Big Meeting に向けた戦略について 2〔川幡部会長/河野オブザーバー(SASEC 議長)〕 [資料 7-1]
・Domestic ISP WS 開催検討
○世話人・テーマ募集 [資料 7-2(1)]
○WS 運営体制 など [資料 7-2(2),7-2(3)]
8. その他
・次回執行部会日程 等

配布資料

資料 1	J-DESCCS_ロギング基礎コース_収支決算報告
資料 2	IODP 掘削プロポーザル作成支援課題 採択一覧
資料 3-1	H20 年度第 1 回掘削航海専門部会議事録 (案)
資料 3-2	掘削航海専門部会マニュアル (案)
資料 4	南海掘削シンポジウム開催案
資料 5-1	日韓合同深海掘削シンポジウム プログラム
資料 5-2	日韓合同深海掘削ワークショップ準備状況
資料 6	ちきゅう船上スクール企画書 (案)
資料 7-1	IODP Day 報告
資料 7-2(1)	Domestic ISP WS 世話人・テーマ募集案
資料 7-2(2)	Domestic ISP WS 分野
資料 7-2(3)	Domestic ISP WS セッションコメント集
参考資料 1	J-DESC Schedule

報告事項

1. J-DESC コアスクール：ロギング基礎コース実施報告

山田委員がこられてから報告

2. IODP 掘削プロポーザル作成支援課題選考結果について

資料2に基づいて事務局より説明があった

- ・ 鹿児島大学小林氏の関東アスペリティについて、国内科学計画委員会で350万円にて採用が承認された
- ・ 今年は「南関東」→「関東」にタイトルが変わった
- ・ 小泉委員会で井龍氏より、リバイズが出ていないといったご意見があったが確認してほしい

3. 専門部会活動報告・掘削航海専門部会

資料のマニュアル・議事録を参照しながら山崎委員よりご説明があった

- ・ 前回の部会で、マニュアル作成が開始された
- ・ IODP の概説から始まり、部会任務についての議論が行われた
- ・ 科学推進専門部会でのランキング方法を振り返って、本部会では委員全員が関わりながらコーチフと密に連絡を取りながらランキングすることが合意された
- ・ 委員会の役割として、ランキング以外にもトータルで航海の成果があがるようにするのが役割なので、具体的な要望を部会から執行部へ出していきたいということを提言した
- ・ 日本人コーチフのいない航海へのケアも期待されるということもはなした

坂本委員より補足

- ・ ランキング時の個人情報の取り扱いが議論になった。クレームが出たときの処理の指針を示すべきだという意見が出たが、これは事務局持ち帰りとした
- ・ 乗船推薦枠（日本8名）に満たない場合の外国研究者の取り扱いに関する議論もあった。
- ・ GBR でオーストラリア人を日本枠で乗せたいという要望があり、議論も行った。日本の研究機関に所属する人を優先するのは前提だが、一時的に日本の研究機関の肩書きを持って乗ったという経緯がある。それを確認したうえで議論した
- ・ “乗船時”は日本の研究機関に所属していればJ-DESCは支援するが、乗船前や乗船後については議論が必要。例えば、ポストクルーズミーティングでは実績があるが、アフタークルーズワークスについては前例がない
- ・ 出版物が少ないので、航海後に日本語の特集号など年に一冊は出版できるよう議論しようという意見も出された。日本語での出版について執行部へ上申するという議論があった

以下質疑

- ・ モラトリアム後であるにもかかわらず、出版物が無いのは問題
- ・ 地質学会でのセッションなどはいいいアイデア
- ・ 航海前にアナウンスする機会も重要
- ・ 地質学会には地球物理の人が少ないのでそのケアも大切
- ・ 現状をAESTOで取りまとめているが、誌上発表は殆ど無い状況。日本から22名が乗船した「ちきゅう」航海のモラトリアムが2009年2月にあける。もう少しプッシュが必要
- ・ GBRについて補足：タヒチ航海では年代特定が問題となった。GBRでオーストラリア人を日本枠で乗せるには二つ理由がある。1.GBRはオーストラリアの領域 2.オーストラリアからの乗船者のラボには年代測定の設定があり、日本の主導の下に年代が出せる。GBRでは成果も期待できる。

4. 普及広報関連報告

・ 南海掘削シンポジウム準備状況

川村オブザーバーより報告があった

- ・ 執行部からの要望は真摯に受け入れているが、シンポジウム発表者の選任はまだ進んでおらず8月中に決める予定
- ・ 会場(経団連会館)は確保してある

・ IODP 普及キャンペーン開催報告

事務局より報告があった

- ・ 大学キャンペーンは9月5日に筑波大学で実施予定
- ・ 産総研標本館は盛況に終わった。今後「ちきゅう」モデルも含めて2ヶ月間展示を行う。
- ・ 一般向けのパンフレットなども作成されている（山崎）

質疑

- ・ 来年度以降の普及キャンペーンを同じようにやるのか、もう少しターゲットを絞るべきか検討したほうが良いという意見があった（川幡）
- ・ 今年は授業に組み込んだキャンペーンもあって、新しい方向性も出てきている（事務局）
- ・ 具体的には、第一期目の執行部委員に状況を説明して相談してみるといいかもしれない（電話でも）。雑談のときにでも JAMSTEC 理事にも相談してみる。できたらもう少し効率的に実行できるように考えたい。産官学に関連して、賛助会員にも還元できるようなものがあるだろう（川幡）
- ・ 今後沖縄トラフで掘削もあるので、琉球大でもやることを考えるといいだろうというアイデアを出した（山本）
- ・ 巽氏が 10 月に未来館で掘削科学の講義をするという話がある。地下圏微生物についても IBM と一緒にやるという話があった。J-DESC の協賛をいただきたいという話もあった。市民大学というレベルだが、看板として J-DESC が出るだけでも意義があるだろう（山本）
- ・ ターゲットを定めたほうが良い。5 年、10 年先を見据えるとやはり学部学生をターゲットにするべきではないか。また博物館キャンペーンには国民に還元するという意味もあった。それも進めていくべきだろう。（松本）
- ・ いい面・悪い面を客観的に分析することが大切（川幡）
- ・ JR 号 3 航海の事前普及広報について
事務局より経緯の説明
 - ・ J-DESC より承認があれば、コチーフの方々にもご協力頂きながら、今後サイエンスカフェなどを企画したい

質疑

- ・ 事前広報は、皆さんの負担にならないのであれば、いいのではないかと（川幡）
- ・ 時期的な問題も考慮が必要（阿波根）
- ・ 10 月末から 11 月はじめ頃にカンタベリーの事前広報を行う予定（事務局）
- ・ JR のスケジュールを確認する必要がある（阿波根）
- ・ 「ちきゅう」の広報は良くなされていたが、JR についても同じように PR できたらと思う（事務局）
- ・ 掘削航海専門部会では、スケジュールが決まったらプロポーザルにアクセスできるのか？プロポーザルを元に、事前に Community に「こういう航海があるよ」というお知らせが出来れば良いと思う（川幡）
- ・ アブストラクトは読めるがプロスペクタスレベルはスケジューリングが終わらないと読めない（坂本）
- ・ 日本人がプロポーネントの場合は、航海の概要を書いてもらう（川幡）
- ・ 日本語のウェブページがあるといいのではないかと。それを掘削航海専門部会のタスクとするといいのではないかと（坂本）
- ・ アブストラクト + α (目的・どういう成果が期待されるか) の情報を書いてもらい、ウェブページをつくる（川幡）

検討事項

5. 地質学会日韓合同シンポジウム&WS 準備状況

資料 5-2 により川幡部会長・松本委員からご報告

- ・ 日韓で、シンポジウムを開くだけでなく共同プロポーザルを書きましょうというご意見が韓国よりあり、東シナ海で、テクトニクスなどのプロポーザルを書くことになった。松本委員が代表。
- ・ 今年宮下氏が地質学会会長で、秋田大学で開かれる際にシンポと WS を開催する
- ・ 実際のプロポーザルは松本委員と Jin Ho Kim 氏が代表として取りまとめることになる
- ・ 21 日にシンポジウム、22 日（～15 時）にはプロポーザル作成ワークショップを開催する。WS は市民交流プラザにて開催する
- ・ WS でシンポでは発表しない 3 名の発表をおこなったあと、プロポーザルを実際を書く作業に入る。
- ・ 日本からも地球物理系・テクトニクス・環境・Deep biosphere の方々にアナウンスして WS には来ていただくといいのではないかと
- ・ 産総研の板木氏は沖縄プロジェクトについて発表を行う
- ・ 東シナ海はアジアモンsoonよりはテクトニクスに主眼を置くほうが良い

- ・ シンポジウム後、松本委員が韓国に行ってアフターケアをする必要がある
- ・ 中国もプロポーネントに入っていたほうが良いだろう。中国・台湾関係はとてよくなっているの
で、中国・台湾の方を含めることについては、松本委員が検討する
- ・ シンポ前に AESTO から広報、ウェブでの宣伝が可能
- ・ **WS** プログラムの大枠は松本委員と **Kim** 氏とで検討する
- ・ **J-DESC** の費用で韓国の方 7 名のホテル代を支援する
- ・ 日韓共同シンポの際に、今現在はお互いに招待しあっているが、いずれは自分の旅費は自分で持つ
ようにという取り決めをする必要があるだろう
- ・ **WS** の会場配置や開催形式は、松本委員と先方とで今後議論して決定する（パネルディスカッショ
ン形式、午前中に全体会議午後にはブレイクアウトセッションなど）

6. ちきゅう船上スクールへの協力体制について

資料 6 を参照して、川村オブザーバーより **J-DESC** の協力について説明、依頼が行われた

- ・ **CDEX** が主体ではあるが、可能であれば経費についても **J-DESC** にご支援いただきたい

以下質疑

- ・ テキスト、傷害保険は大丈夫だが、講師旅費はもともと **CDEX** が持つのではなかったか？このコ
アスクールは通常のコアスクールとは趣旨が少し違うため、**CDEX** で出していただきたい。会員機
関からの参加者に 1 万円の支援はできる（川幡）
- ・ 持ち帰って **CDEX** で検討する（川村）
- ・ 「コアスクール」を使わないならば名称をどうするか？（事務局）
→「乗船体験コース」など別の名前をつけてほしい。同じカテゴリーではないことがわかるように
してほしい（川幡）
- ・ いずれはサイエンスのトレーニングとしてのサマースクールなどが実現できると良いだろう（川
幡）

7. SASEC Big Meeting へ向けて 2

SASEC 河野議長より **IODP Renewal** スケジュールと現在の問題点についてのプレゼンテーションが行わ
れた

質疑

- ・ **SASEC** で決まらなかった **APP** はどうなったか（阿波根）
→ 予算会議が持たれて、今後 **IO** が予算をつくる。現在報告待ち。Budget Subcommittee が **SASEC**
に報告・提案をすることになっており、その後 **SASEC** にてメール議論
→ 22 日、23 日で会議があった。最終的な改訂案締め切りは 8 日。16 日には **MI** から **FY09** の **APP**
が渡されることになっており、航海予定等もわかるだろう。総額 6 - 7% ほど頭が出ているのが
現状（川村補足）
- ・ オペレーションについては毎年 200 億円くらいで動かしているようだ。2013 年以降日米対等はある
はず、**IODP** の中で日本の主張をしっかりと位置づけていくことも大切である（川幡）
- ・ **Big meeting** 後、**ISP** は皆で作り上げる。日本としてやらねばならない事を 3 つ ~ 4 つは打ち出さ
ねばならない。**SPC** でも現在同テーマで違う場所といったものがたくさん出ている。次の **IODP**
では、Innovative, New science, 「ちきゅう」に関連したものを打ち出さないといけないだろう（川
幡）
- ・ 各航海終了後の科学的成果レビューは **SASEC** がやっているのか？（坂本）
→ 航海後オペレーションに関するレビュー会議があり、サイエンスのほうは、**SPC** でプレゼンテー
ションなど行い、数年分まとめて **Thematic review** を行う。**SPC** で直接的にレビューし、**SASEC**
が見るのは最終段階。

(10 分休憩)

- ◆ 休憩後、宿利企画官より退任のご挨拶があった
海洋地球課から、森林総合研究所へ出向という形です。二年間ありがとうございました。「ちき
ゅう」運用の画期的な時期に関われたことはうれしく思っています。2013 年にむけて大変な時
期に離れるのは心苦しく思います。日本がリードしていく最善の方法を進めていかれることを祈
念申し上げます。後任は、堀が着任します。お世話になりました。

◆ 引き続き Big Meeting に向けた戦略について 2

資料 7-2 に基づいて Domestic ISP Workshop の開催について川幡部会長より概略の説明が行われた

- ・ 今月中に世話人募集を開始したい(締め切りは 8/20 前後)
- ・ 日本から必ず 3~4 テーマを打ち出せるようにしたい
- ・ はじめに世話人会を開催したあとに WS 参加者を募る
- ・ 11 月末に全員での WS を開催する
- ・ 一人 A4 で 1-2 ページの文書を用意してもらう
- ・ 12 月は世話人だけで集まり編集作業を行い、1 月の SASEC において書類を渡す
- ・ Geohazard 分野など人が少ないものは佐世保の「ちきゅう」上でお願いしたい
- ・ 参加者の依頼出張中 20-30 名は枠を残し、世話人推薦の若手を呼び書いてもらう
- ・ 招待が 120 名より多いと予算的にかなり厳しい(事務局)

皆様ご意見

- ・ SASEC の話、ありがとうございます。ODP に比べて航海数が少ない状況で 10 年を過ごす中で 2013 年以降を考えるのは難しい。J-DESC 執行部で議論してきた、成果をあげるための支援はともいいと思う。IODP 航海では ACEX に関わっているが、BigMeeting に向けて今まで乗船した/今後乗船する 100 名前後に一筆啓上してもらうのがいいと思う。科学的成果や、ISP とのかかわりで書いていただくと面白いのではないかと。議論の題材にもなるだろう。(坂本)
- ・ 出版も考えているのか？(川幡)
- ・ そこまで具体的ではない、発表でもいいかもしれない。それをやることによって乗船した 107 人が下船後何をやってきたかがわかるだろう。(坂本)
- ・ COMPLEX が印象的だったのは、小グループで欧米の若手がいろいろな意見を出していたこと。そこからレポートをまとめる作業が印象的だった。今回の DWS でも若い世代を取り込みながら意見を吸い出す形のミーティングに出来ればいいと思う(坂本)
- ・ ブレーメンのミーティングは大きなもの小さなもの平行して行われるのか？(川幡)
- ・ ブレークアウトはかなり長く時間をとるだろう。場所は 300-400 名入るホールとブレークアウトのための 4 部屋くらいは確保してあるだろう。詳細を決めるステアリングコミッティは今度 SPC 札幌で初会合が行われる。大きな会合は AGU で初めて持たれる(河野)
- ・ DWS は最終的には国際 Big Meeting に向けてテーマをシフトすることも出来るが、ある程度は日本の独自のカテゴリーに分けて実施する(川幡)
- ・ IODP があまり順調でないことには不安だが SASEC が真剣に心配していることがわかったのは安堵できた。私に関わるのは Seismogenic zone の Longterm monitoring で、始まってもない状況で次の状況を考えるのはつらい。最初の目標をすべて達成するのは無理だろうから、現在までに立派な成果だと外部レビューで認めさせたうえで、今フェーズで残したものを次の ISP に盛り込むことが大切。そのための方策を考える必要があると思う。CONCORD を日本でやったときには、その前に小さな勉強会をもった。今回も若い人をたくさん拾ってブレークアウトすることが大事。若い人が自分のこととして感じるのが大切(日野)
- ・ Big meeting 後に実際に「書く」期間があるから、小さいミーティングをやっていくといいだろう(川幡)
- ・ Big Meeting からのインプットだけでなく、ISP を書くときには、やり残しについても必要。ただ Big Meeting 自体にはそういう要素を考えずに、こんな新しいことがやりたいという要望が多く出るほうがいいかもしれない(河野)
- ・ 小さなミーティングを重ねてポリッシュアップしていく(川幡)
- ・ 技術開発のほうからの意見を集めたところ、「何が可能になったか」というレビューをしっかりとっておいてほしいという意見があがった。WS を開くことによって技術開発を宣伝することも含めてほしいという意見もあった。(山田)
- ・ この 10 年でテクノロジーはかなり違うのか？(川幡)
- ・ 「ちきゅう」ができて、ライザー掘削ができるというのは画期的。2013 年以降に打ち出す新しいテクノロジーである Ultra deep drilling に関する議論が必要だという意見があった。(山田)
- ・ Ultra deep drilling はモホのためにも必要なかもしれない。科学的には悲願です。「ちきゅう」はそのために作られている。最終的には達成したいと思う(川村)
- ・ 今はライザーで掘ることに新技術を使うステージ。現在ロギングはうまく行きつつあるが LTM のツールを作ることは難航している。これらを現ステージの成果として評価して、次のステージを考える必要がある。Big meeting の場でも掘削に関する技術とのやり取りは必ずあるはずで、テクノロジーとサイエンスの進み方についてある程度の絵がかけるといいと思う(日野)

- **Geohazard** についても意見を頂いた。深いほうでは地震の方とのコラボレーションが大切。浅いほうでは、沈み込み帯でのハザードを念頭において話をしたが、浅いところを面的にカバーする井戸をたくさん掘ることによって、周期的な地震深度の面的な広がりを持った情報がとれる。このような具体的な方向性が上げられている。深いほう浅いほう二つを組み合わせることで、両者のカップリングが見えてくる。両者のアプローチを組み合わせるといって沈み込み帯でのジオハザードを理解することが必要であり、これが日本から発信するものとして、柱の一つとして重要ではないか（山田）
- モホや **Subduction factory** など「ちきゅう」で実施するというのを打ち出せるようにするといいいのではないか。 **Big meeting** ではサイエンスだけを議論するのか？技術的な面、予算なども含めて議論するのか？（高澤）
- **Technology** なども、持ち出せばたいいものを **Big meeting** に含まれると思います。 **ISP** では特に **Community** 主導の形が非常に重要。白紙の状態から何をやるのかを決める状態では、多数決になってしまい、大深度掘削に勝ち目は無い。「こういうことをやる」と大きな声で言うておいて、 **MOU** などでも枠が作られているような状態で無いと実施にいたらないだろう。最終的にはお金を出すところが強い。最初にコミュニティから、「これが絶対必要だ」と声を上げて言うておく必要がある。（河野）
- 航海数が少なくコミュニティが離れることが懸念されるのはそのとおり。プロポーネントの立場でも、正直モチベーションを保つのが大変。プロポーザル募集を止めようかという **SASEC** の議論も一理ある。何とかならないものか、と思う。若手への利益もそのとおりだが、定員が埋まらない。 **Big meeting** に出席して **Big science** の進み方が初めてわかって古地磁気もアピールした。その経験がとても役に立っている。若手にぜひ行ってもらいたいで、国内ミーティングは大切。スケジュール的には国内は一回でやってしまうのが現実的かと思う（山崎）
- 分野別の話は個別にやったほうが良いのでは。それが二泊三日。来られない人にもレポートの提出はオープンにする。（川幡）
- 2013年以降は厳しいという印象を抱く。この10年の成果で **ODP** よりもアビリティが低いと評価されるとまずいだろう。次のフェーズには今までのくくりを分解して全く新しい視点でテーマ、キーワード4つくらいをあげるような計画でなければインパクトが弱い。ジオハザード級のを後3つほど日本から打ち立てて、 **Big meeting** に望むことが出来ないかというのがひとつの意見。もうひとつは、 **IODP10** 年がうまくいっていない原因の分析が大切だということ。原油高騰の事情を別にして、稼働期間中に **ODP** 以上の成果が上がっているか、などの吟味が必要。博士の学生についても参加してもらおうようにせねばならない。執行部立ち上げの頃に学生を取り込む議論があったがあれからどうなったのかも聞こえてこない。こういったところの解決から問題解決を始めるべき。（松本）
- 始めの頃にモチベーションの低い学生が乗ってしまったようなことは、今後起こりにくいと思われる。（川幡）
- 現在のコアスクールやニューイヤースクールのポテンシャルは高い。向こう10年間で30航海がすべて行われたとしても人数としては **ODP** より少ないので、比べるのは難しい問題。成果が正当に皆に認知される、手段を考えるべきだろう（坂本）
- 航海は減っても日本人枠が増えているので日本人参加者は **ODP** に匹敵するほどであれば、成果もそれなりに出ているべき（松本）
- **MSP**、ちきゅうはこれから成果が出るだろうと確信している。 **JR** には **J-DESC** としてもケアが必要かもしれない。コチーフをヘルプする形で的人選が必要。日本人コチーフが乗る航海ではうまくいくのではないかと思う。（川幡）
- 普及活動は重要だと思う。コアスクールなどとは別で、多数の人にテーマが出た後に何故この研究が大切なのかということ、5-10年後を見据えてサイエンスの潮流とともに示す。進路の選択肢に入れてもらえるような普及活動が大切。 **IODP** という単語を耳に入れてもらうことは大切だと思う（井上）
- **ODP-IODP** で船の稼働率はさしたが日本人は100人近くが乗っている。乗船後の成果がでるようなケアが必要。若手のエンカレッジに関して、私は **CONCORD** には院生アルバイトとして参加したが、国内版の **WS** でも院生にはプロジェクト係などでブレインストーミングの過程を見せることが出来るのではないか。ボランティアでもいいかもしれない。（阿波根）
- **Deep Biosphere** では一度もメインテーマとして掘削されていないということはとても頭が痛い。それで次の **ISP** を考えるのは厳しいが、コンセプトの書き換えくらいは出来るだろう。 **Deep biosphere** 自体日本国内では学生が育っておらずあまり良い状況ではない。沖縄トラフはもう少し

早く実現すると思っていたが、6年掛かった。Big Science の中で何かをやることは大変で、Deep Biosphere では新しい人が参入しても10年かかるだろう。あと4-5年たってから様子が分かるかもしれない(山本)

- 新しいコンセプトというのは頑張れば何とかできるだろうが、意欲ある若者が掘削するのに時間がかかることを考えると、掘りたい意欲から新しいコンセプトになるのが一番理想の姿。現在あるプロポーザルの中で推したいものを新 ISP でハイランクになるようにもっていけるかも考える必要があるだろう(日野)
- 白紙から始めるのもひとつのやり方。ジオハザード以外は全て白紙で、3-4つくらいテーマが出来るといいかもしれない(松本)
- Deep Biosphere の現 ISP は殆どのがカバーされており、良くかけている。その中からある部分をやろうというのがプロポーザルになっている段階なのが Deep Biosphere の現在。次に ISP を創るときには、今あるものを噛み砕くと言うことになるのではないか(山本)
- ヨーロッパは EGU のときに Big meeting に向けた meeting を実施するようだ(河野)

まとめ:

- Big meeting に向けて DWS を開催する。今日の議論を読み直して意見を集める。
- 最終会議日程候補: 12/6 (土) or 12/7 (日) 周辺で、なるべく6日の方向で調整する(11/16-11/28は微生物関係者が出払い、中旬以降は AGU)
- ジオハザード世話人に山田氏が立候補。松本氏は補佐役として立候補した
- 世話役は来年の Big Meeting までは任務を継続するというので10月11月の執行部会で議論をしたい。その後は次期執行部で議論していただく。
- SASEC にも、DWS の報告をする。SASEC のときに結果の印刷物を配布して進捗状況の報告をする

8. その他

- 日韓 WS の開催形式(事前申し込みにするかどうかなど)はメール会議で決定する
- ロギング基礎コース、非常に満足度の高いスクールでした。演習時間が短すぎたことが不満を誘った。全体的には非常に好評でした。アドバンスコースをやろうという議論は進んでいる。もう少し具体的に人数を絞ってやろうかと議論が進んでいる。(山田)
- シュルンベルジェに見学に行ったが、現地に行ってテスト孔を実際に見ながらできるといいのではないか(坂本)
- 今回は孔内計測 WG の活動の一環として、研究者主体で開催した。受講生は非常に満足していた。ログを使った研究にも興味を持ってもらえた(山田)
- 島根大学汽水域研究センターから、存続のためにも J-DESC よりセンターの存在が必要であるというサポートを表明してほしいと要請があった。センター長の野村氏は SPC 委員でもあり J-DESC に貢献もあるのでプッシュしたい。(川幡)
→反対意見は無く、承認された。
- 次回執行部会日程等
→次回開催は10月を予定しているが、メール会議は継続する。世話人募集も始める。若手枠も残り、若手の選定もスタートさせたい。